

言語理論と言語進化

三木那由他 (Nayuta Miki)

京都大学

本発表は言語の理論と言語の進化論の関係に焦点を当てる。今回は特に数ある言語理論のなかでも生成文法の系列に属す各理論に注目する。

生成文法は決してひとつの確固たる理論ではなく、そのなかにいくつかのヴァリエーションが存在している。歴史的に見れば、それは標準理論、拡大標準理論、統率束縛理論、ミニマリスト・プログラムという変遷をたどっている。これらは生成文法という枠組みにおける理論の展開であるとともに、Chomsky というひとりのリーダーが掲げるプロジェクトの展開でもあった。この流れに対し、現在 Pinker や Jackendoff のような一部の論者は、Chomsky のミニマリスト・プログラムを批判し、彼の手から離れた言語理論を構築しようと試みている。

生成文法は統語論を主題とする。そして統語論的構造は言語の中核と目されている。したがって生成文法における見解の違いは、ストレートに言語観の違いをもたらす。言語観の違いは、言語の進化論において説明すべき事柄が何であるのか、引いてはどのような進化論が妥当であるかといった問題に、まったく異なった答えをもたらすことになる。

初めて言語の進化という問題がクローズ・アップされた統率束縛理論においては、原理とパラメータというアプローチが採用された。これは諸言語の青写真として普遍文法が存在し、その内部の未設定のパラメータが設定されることで、諸々の個別言語へと発展するのだという考えを可能にした。これにより言語進化を普遍文法の進化と捉える見解が生じることとなった。これはいまでも生成文法の進化論における基本的な構想となっている。

統率束縛理論において、生成文法には多数の原理が含まれていた。それゆえこの枠組みにおいて言語進化を説明するには、そうした多数の原理の進化を説明しなければならない。これに対し、後に Chomsky が提唱したミニマリスト・プログラムでは原理の数は最小に切り詰められることとなる。こちらでは、進化すべきは Merge というただひとつの操作にすぎない。この違いは重大で、これにより Chomsky は言語のスパンドレル説を提唱することができ、対してミニマリスト・プログラムに反対する論者は言語の適応説を取るものとなる。

特に、ミニマリスト・プログラムに反対し、独自の統語論を構築する Jackendoff は Chomsky のラインを離れ、言語の適応説を強く支持する議論を展開するにいたっている。

本発表では生成文法の展開を見ながら、そこで現れる各理論の特徴、及びそれらと言語の進化論との関係を整理する。また可能であれば、本発表はこうした理論の展開が普遍文法の存在を認めない論者にとってさえ無視できないものであるということ

論じたい。文法に関してどういった見解が妥当であるのかという問題は、普遍文法なしにそれらを説明しようという人々にとっても決して無関係なことではないのである。そこで問われているのは、そもそも何が説明できれば文法の存在を説明したことになるのかということなのだから。